

エッセイ

故郷喪失の半世紀と日本

ウラディミール・タマリ氏へのオマージュ

長沢美沙子（中東文化研究家）

『現代思想』（特集パレスチナ—イスラエル問題—暴力と分断の70年）2018年5月号所収（pp.190-207）より転載されたものですが、部分的に訂正加筆をされています。

「パレスチナ人画家、ウラディミール・タマリが75歳でこの世を旅立ったとき、パレスチナは並外れた才能を持った一人のパレスチナ人を失った。美術と物理学という異種の分野にまたがってどちらにも優れた能力を発揮していた人であった。ただし、本質的には、はるかに美術家であった。」彼の死を悼んでこう私に電子メールで書いてきてくれたのは、友人でありかつて彼の隣人であった人類学者のローズマリー・サーイグ。パレスチナ難民についての調査研究の先駆者で、私がパレスチナに関心を持ち始めた40年前、カナダ留学時代に洗礼を受けるように読んだ本『パレスチナ人—農民から革命家へ』（1979年、英文）の著者である。

ウラディミールは2017年8月6日に世田谷区駒沢の自宅で息を引き取った。75歳であった。10ヵ月にわたる癌の闘病生活であったが、その最期は安らかであった。愛しい家族や友人たち、医師に囲まれ、永遠の眠りについた。そのほんの数時間前には、ほぼ完成させた大きなキャンバスの桜の油絵に最後の色を加え、署名と日付の筆を入れた。その最後の大作は寝室を華やかにした。そして彼は逝ってしまった。神の国に招かれたかのように。生まれた地エルサレムに向かうように。奇しくもその日は悲劇の日であるとともに平和を願う記念の日、ヒロシマの日であった。

8月9日に東京復活大聖堂（ニコライ堂）で厳かな葬儀がとり行なわれた。多くの日本の友人が最後の別れを惜しんで集まった。後日、故郷のラマッラーで行われた追悼式には多数の参列があったという。

オペラ歌手として活躍する長女マリウムは 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から 7 年目の 3・11 の日に、父が描いた絵をネットで公開し、こう書いている。「父ウラディミール自身ナクバ（1948 年の大災厄）を経験し、生涯にわたって、絶望のどん底を繰り返した。と同時に、彼は常に人類（ヒューマニティ）と、物理学研究の一つとして彼が名づけた『美しい宇宙』とは別々のものではなく、つながりのあるものとしてとらえていた。深く共感しようとする、その心は彼がやってきた仕事の中では一本の糸となっていた。彼にはいつも『そして希望』が存在した。」

美術家であることと科学者であることは、ウラディミールの中では一つ。ワンセットのような補完し合うものだったのかもしれない。しかし、物理学研究者・発明家としてのウラディミールのことは専門的すぎて、趣味の世界に没頭されているのだらうと遠くから眺めているだけだった。この分野に明るい人でなくては理解できないレベルだった。

亡くなる前年の大手術後、海外から帰国した二人の娘たち、孫たちと一緒にクリスマスを過ごした。娘たちはその後も何度も帰国し、父と過ごす時間を大切にしたが、8 月に父を見送ったマリウムは、葬儀の 2 カ月後、いただいた多くのお悔やみに対する返事を SNS で次のように書いている。

「彼はヒーローでした。命の尽きる時まで穏やかで、他人のことだけを考えていた人でした。『死ぬことは怖くはないよ』と微笑みながら私たちに言いました。病を受けとめていました。残酷で不可解な病気に見舞われながらも、物理学研究者としての客観的好奇心と美術家としての知恵と並外れた才能、そして暗闇の中でランプの灯火を持って先に道を歩く静かな勇気と、人を安心させてくれるオチャメなユーモアを見せてくれました。亡くなる 3 日前に、友人、家族、医師と看護師が彼のベッドを囲んで開いたミニホームコンサートで彼は『ブラバ！』と声を上げていました。そして彼は、絵を描くことを最後まで止めませんでした。17 時間の大手術後の ICU の中でも、亡くなる前日の夜でも。友人の誰もが彼を優しく親切な人として記憶してくれていると思いますが、そしてそれはその通りなのですが、優れた美術家であり科学者であるだけでなく、考えられうる限り最も慎ましく、純粋な心を持った子どものような人でした。50 年以上の亡命（exile）生活を送り、そして隠遁者的な傾向があったにもかかわらず、パレスチナではアッバス大統領や文化大臣を含む 2000 人を上回る人々が弔問に訪れてくださいました。日本では 200 人を超す人たちが来てくれました。父の最後のベッドは花と、彼を慕い、自分の友人のように思ってきた子どもたちが描いたカラフルな絵で埋めつくされていました。」（原文は英語）

「あっ、ニンジン！」

パン作りの名人だったウラディミール。ほぼ毎日曜欠かさず教会に通っていた。教会に通う時たくさん焼いたパンを持って差し入れをしていた。パイプオルガンのある教会で許されてオルガンを弾くのを楽しんでいたウラディミールはヴォヴォ(Vovo)というニックネームで親しい人から呼ばれていた。道を歩く彼に向かって、「アメリカジン、アメリカジン！」

「ガイジン！ガイジン！」と悪ガキに言われ、怒って「チガウ！」と憤慨して返した後すぐに、「あっ、ニンジン！」と言い返したような人だった。悪ガキの方はびっくりしてヴォヴォの顔を呆然と見つめて声が出なかったのではないだろうか。

妻の京子さんから聞いたこのようなエピソードはまだまだ続く。

世田谷の路地で悪い遊びをしている若い男の子たちに「君たちは将来お父さんになる人なのだから、ちゃんとしてよ！」と注意をしたら、「はい、どうも。将来のオジイサン！」と言われてしまった。「最近の若い子たちもユーモアがあるね」と感心していたという。妻に作ってもらったお弁当を携え図書館に行ったのに、公園のベンチに腰掛けてお弁当箱を開いたらア〜ンと口を開けて寄ってくる幼い子どもたちに全部食べられてしまって、空腹のまま帰宅したということも。彼を見つけると一目散に近づいてくる近所の自閉症の子どもとは特別なサインで親愛の挨拶を交わしあっていた。その子は、めったに人に話しかけることがなかったが、ウラディミールだけは別だったらしい。その子はその後ホテルでの仕事を心得、外国人と接する時に、必ずきちんと挨拶できるようになった。それはウラディミールのお陰、とその子の母親に京子は感謝されたとか。

ウラディミールには自転車はなくてはならないものだった。自転車でどこにでも出かけたが、ほぼ毎日向かったのは図書館。そして美術館。公園やカフェ、多摩川沿い。スケッチブックを欠かさず持って。静かな住宅街ばかりでなく、時には遠出もしていたのか、私がたまたま渋谷の大きな文具店にいて、エスカレーターで上がってくる懐かしい人を見つけたとき、その偶然が信じられなかった。数年間会う機会がなかったのに。そのとき初めて、近所にしか出かけないという想像は私の思い込みで、実は自由にどこにでも出かけていたのだと知った。

なによりも大事な家族の中で使う言語は英語と決めて、二人の娘たちにはアラビア語を教えなかったが、美しいアラビア語の詩は暗唱させていた。最初に来日したときは、半年のビザで滞在するだけのつもりだったから、日本語を本格的に学ばないまま時間が過ぎていった。しかし、不安定な中東情勢が続いたため、滞在ビザの延長を繰り返しているうちにそのまま日本に居ることになったという。やがて時が経ち、永住権を取得したとも聞いた。日本語は上達しなかったけれど、公園や道で親しくなる人たちとは日本語でしっかり心を通じ合わせていたという。

妻には結婚記念日に絵を描いて愛と感謝のカードを必ず贈っていた。「結婚〇周年+2年」と出会ってから年数を必ずカードに書き添えて。昨年12月に結婚50周年を迎えるはずだったが、それはかなわなかった。ピアノが弾けて、尺八も演奏できて、家族で合奏や合唱を楽しんだ。テレビを置かず、幼い子どもたちとは読書や手作りのゲームや絵を描いたり、散歩したりと、子どもときちんと向き合ってきた。身の回りの不便なものはすべて改良したり修繕したりと器用にやってくれたので、「家の中はすぐに問題解決して、助かったのに」と嘆く京子さん。「最近ご主人をお見かけしませんが、お元気ですか？」と近所でも知らない人からよく声をかけられるのは辛い、彼がいかに近所の人たちと温かい交流をしてき

たか、改めて知る日々だそうである。

魂の友であり、最愛の夫を失ってまだ数ヶ月。喪失感を抱えておられる京子さんを訪問することに二の足を踏んでいたが、本稿の執筆依頼を受けて勇気を出して駒沢の集合住宅の中にあるご自宅に今回初めてうかがった。弔問客の立場でもあり、緊張していた。しかし明るい声で迎えてもらい、緊張はどこかへ吹っ飛んでいった。「引っ越し貧乏です。でもこの住まいに移ってもう20年以上になりますね。娘たちが大学進学で日本を離れてここに引っ越して、それ以来ずっとここです」と心を開いて話しかけてもらえる。1970年秋に来日してから、京都、葉山、その後、杉並区と世田谷区の中だけで5回も引っ越しを繰り返したとか。「ウラディミールは、モノに執着はしないし、スペースの狭さにもこだわらない人でした。こんなに狭い日本の住宅でも、一度も不平を言ったことがありませんでした。」それから再会早々にたちまち会話がはずみ、おばさんの女子会のように、話があちらこちらへと飛んでしまう。とても亡くなった伴侶について真剣に聞くという方向に切り替えができないまま、時間が過ぎていく。おしゃべりでふたりとも慰められている。京子さんが午後の職場に出発する時間が迫ってくるのに、彼女自身のバックグラウンドについて話をうかがっていると、もっと知りたくなってしまう。母方の系譜をさかのぼると、水戸におられた曾祖母が日本で最初のクウェーカー教徒（フレンド派）の一人となったという話や、祖母、母へとクウェーカー教徒として続いてきた話に興味津々になる。満鉄勤務の父と共に家族三人が恐怖と死と隣合わせの戦後の混乱の中で苦勞をしたこと、いわば難民として帰国したことなども聞いた。ハルピンからの逃避行の明日をも知れぬ日々がパレスチナ難民の苦難と重なって見える。

京子さんはバレエの衣装のデザインと縫製の仕事をする一方で、以前に二人の娘が通ったインターナショナル女子校で、長年日本語を教えて定年となり、今は同じ学校で子どもたちに課外活動講師として手芸を教えている。

生い立ち

ここからはしばらく、ウラディミールが自分のホームページに書いている短い自伝を紹介するかたちで書き進めたい。

東方正教会のキリスト教徒の家系に1942年に生まれた。生を受けたのはエルサレムだが、タマリ家のルーツはヤーファ（ジャッファ）。1948年にイスラエル領になった古くからの港町。幼少の頃からラマッラーで育ったが、ヤーファでの思い出も自伝には出てくる。ヤーファとエルサレム、ラマッラーの間をとよく行き来していたようだ。

1940年代半ば、ヨーロッパの戦争で緊張もあったが、パレスチナでの暮らし向きは良く、平和だった。英国の委任統治下にあり、アラブの土地でのシオニストの計画は進行していたが、あからさまな敵対関係にはなっていなかった。そしてイスラム文化色が濃い社会の中の幼少時の記憶はオレンジの果樹園に囲まれたヤーファの平和な家であり、石づくりの家

の並ぶ風景であり、由緒あるアラブの文化遺産であり、アラビア語であったと回想している。ロシア語風の名前をつけられたのは、ヤーファに住む母方の祖父がロシア正教徒の聖地巡礼者たちを受け入れる名誉領事だったことに由来する。

1948年のナクバ、つまりパレスチナ人にとっての第一次ホロコーストに際して、タマリ家の人たちはレバノンに避難した。一年後にエルサレムの北の郊外にある故郷ラマッラーに戻るが、ヨルダン領となっていた。聖地としての重々しい空気が漂うエルサレムの環境と、穏やかな丘陵にぶどう畑があり、野生の花が豊かに咲くラマッラーの自然環境は対照的である。彼はその二つの風景の影響をともに受けて育った。

彼は自分の人格形成には、4つの柱となる要素があったと自己分析している。まず、第一の影響は教会から受けた。宗教儀式はいつしか目に馴染み、体と心の一部になった。第二に、拡声器のない時代のイスラム寺院（モスク）から流れてくる時報の役目も果たす美しい祈りの呼びかけ。第三に、パレスチナ喪失の衝撃によって火がついたパレスチナ・アラブ・ナショナリズム。そして第四に、ヨーロッパの近代文化と価値体系であると。アッラーと預言者ムハンマド、キリストと聖母マリアの名前が日常会話の中にあふれている社会にあっては、西洋の科学技術を積極的に受け入れようとする情熱が見られる一方で、まずはそれが何かを見極めようとする慎重さも同時に強かった。パレスチナの占領という屈辱を受けたアラブ人たちはどう対応すべきかの確かな展望をまだ持てないでいた。

しかし、方向性を見失っていたパレスチナ人は、1967年の戦争で完膚なきまでに打ちのめされ、とうとう立ち上がっていく。64年に設立されたパレスチナ解放機構（PLO）の脱皮と飛躍である。PLOは、明確なアイデンティティと伝統と土地をもつ人民を絶滅させようとする企てに対して、抵抗する一つの応答として出現した、とウラディミールは捉える。67年の戦争当時の彼は25歳であった。

こうした突如として襲った激しい大波のなかで、ウラディミールの世代は皆、自身の世界観を獲得し、知的な人格形成を遂げていった。このような苛酷で不条理な現実に向かい合うことを宿命づけられた世代であった。そのような視点でエドワード・サイードを含めた彼の世代のパレスチナ人たちを理解する必要がある。ウラディミールの場合、第三次中東戦争とされる1967年の戦争が及ぼしたもの、奪ったものの衝撃は、48年のナクバ以上に強かったように思われる。ヨルダンの一部であった時は、パレスチナの西岸地域とは自由に通行もできていたし、ヨルダンのパスポートも所持できていたが、67年6月以降、故郷ラマッラーとエルサレムを含む西岸は、イスラエルの軍事占領下で、まったく異なる状況に置かれるようになった。

なお、ウラディミールの幼年時代、少年時代については、幼い頃からの無二の親友で映画監督、そしてPLOの映画部門を設立したハニー・ジャウハリーヤの死後40年経って彼が書いた追悼文の中にもつづられている。それを読むと幼少期のウラディミールたちが実に自由でのびのびとして腕白で、素敵な思い出を持っていたことに驚かされる。10代になったばかりのイタズラ好きな仲間たちがエルサレムに住む友人の家に集まって、8ミリ

カメラで自作自演のドタバタ喜劇映画を作った。それは大工道具を手術器具に見立てた一種の病院騒動ものだった、と懐かしそうに追想している。

自称「四銃士」を構成していた素敵な仲間たちには、後に写真と映画の世界で活躍するハニー、絵画の道に進むカマル・ボラータとウラディミール、そしてピアニスト・作曲家となるイブラヒム・スースがいた。なんという豪華なメンバーであろう。イブラヒム・スースはその後 PLO のパリ代表になった。後に『ユダヤ人の友への手紙』（西永良成訳、岩波書店、1989 年）を著し、日本でも紹介されることになる。しかし、自宅を演劇と撮影の遊びの場として提供していた友人は、大学時代に悲しい死を遂げてしまったという。

物理学と美術の道へ

ラマッラーの自宅の前にあったクェーカーの男子校に通った後、1955 年にベイルート・アメリカ大学（AUB）に進学する。その時わずか 13 歳だったという。神童として期待されたことは想像にかたくない。けれども、凡人には想像できない苦しみもあったことだろう。後年、ウラディミールは「飛び級は良くない」と述懐していたと京子さんから聞いた。

大学では物理学、そして後に美術を学ぶ。在学中にロンドンの美術学校でも学ぶ。彼の物理学、特に光学の研究と絵を描くこと、そして信仰には共通の探究心が働いていたと私には思われる。光があって絵画がある。また、聖書のなかで「光」ほど大事にされているものはないからだ。

彼の自伝にこういう箇所がある。「その頃の（自分が描いた）絵は岩や石の固さに影響を受けている。しかし、（こうした）岩や石でさえ光や水の流れによって形を変えうるものであるという認識をもつことで自己（の表現）を統御することができた。それは不変の固さと空気のような透明性が結びついた感受性（繊細な感覚）であり、（中略）伝統的なものに対する愛であった。それは芸術家志望であるとともに発明家になろうとする者にとっての豊かな出発点であった。」

ウラディミールの姉のタニアは英文学を専門としていたが、ソプラノ歌手にもなり、ヨーロッパのクラシック音楽やアラブの現代音楽の紹介に貢献している。妹のヴェラもまた陶芸家、イスラム美術史家としての地位を確立し、三人そろってそれぞれの道を極めた。芸術一家なのである。

美術の道を歩み始めたウラディミールであったが、まず打ち込んだのはアラビア語の印刷用の文字、フォントの考案であった。アラブ文字のカリグラフィーの伝統の流れもあるが、アラビア文字フォントの考案にはアラビア語の特性と結びついた壁が立ちはだかっていた。印刷に適したフォントを考案しようとした動機は、パレスチナ問題の啓蒙活動に必要なだと考えたからだろう。ポスター制作など、現状打破をめざす同世代の熱意と無関係ではない。緻密な研究の上に完成したアルクッズ（エルサレム）体は長い年月をかけて改良し、完成させた。印象としては、親しみのあるシンプルで明るい書体となっている。使いやすく考案されているが、残念ながらまだ普及はしていない。

その次に没頭したのは、3DD 立体透視図製作器の考案である。改良に改良を重ね、人生を捧げたと言っても過言ではない。自伝にはその情熱がほとばしっている。個人の特殊な趣味とみなされがちな発明考案の作業だ。京子さんによれば、特許申請にはお金も時間もかけてきたが、一度もそれで利益を得ることはできなかったそうだ。でも彼女は残念がっていない。興味を示したアニメーションや玩具の会社もあったが、ウラディミールが望むような利用の仕方ではないことを知って彼は断ってきた。そうこうするうちに、コンピューターの発達で、違った方向から 3DD が可能となる時代が到来。しかし、ウラディミールの考案した器械は、今も価値を失ってはいないと聞く。38 年も前になるが、ウラディミールを空間の色彩の詩人と評した美術家の鷺見哲彦は、彼から次の言葉を聞き取っている。「形式や方法にこだわりたい」。「パレスチナに帰って、3DD を使い、リアリスティックな絵を描きたい」(『フィラスティン・びらーでい』1980 年 11 月号)。3DD は自分が求める絵を描くために思いつき、改良を続けたのだ。“リアリティ”のある絵を描く道具を。

結婚の前後

テーマを移そう。生涯のパートナーとなった宮越京子といつどのように出会って結婚にいたったのか。なぜベイルートから生活の場を日本に変えたのか。(これ以降、基本的に京子にさん付けはしないことをお許しいただきたい)。

京子との米国での出会いは 1965 年。結婚は 1967 年 12 月。来日は 1970 年。パレスチナを取り巻く政治的環境が緊迫していた。動乱の時期である。

京子が普連土学園を卒業してまもなく米国ペンシルヴェニア州の中心都市フィラデルフィア郊外にあるペンデルヒル学院に留学し、その学業の最後の 4 年目を迎えていた時である。クウェーカーのキリスト教価値観により建学された総合研究所であり学舎でもあるその学院で学ぶために、ウラディミールは 1965 年に入学してきた。AUB とロンドンのセントマーチン美術学校での勉学を終えた後だった。出会ってすぐに良き友人となって 1 年。京子は帰国の準備。帰国の途中でヨーロッパを旅する計画もしていた。それを知ったウラディミールは京子にパレスチナに寄っていくように強く勧める。それでベイルート、アンマン経由でラマッラーを訪問した京子はウラディミールの家族に歓迎され、2 カ月ほど滞在。ベイルート空港でウラディミールに見送られて帰国したのは 67 年 1 月。

一方、ウラディミールはベイルートで UNRWA (国連パレスチナ難民救済事業機関) を職場に仕事を始める。半年後に 1967 年戦争 (六月戦争とも言う) が勃発。パレスチナ人の人たちには新たな恐ろしい現実が突きつけられた。ベイルートにいる彼はエルサレムやラマッラーの家族や友人たちから隔絶され、音信は途絶えた。両親の消息もわからず、焦燥と不安と孤独な日々だったであろう。ウラディミールから京子にプロポーズの手紙が届いたのはその頃。親友のカマル・ボラータが役買ってくれた。京子はその手紙に込められた美しい物語を昨日のことのよう語ってくれる。両親からも祝福され、京子は単身ベイルートに旅立った。着物とウェディングドレスをスーツケースに入れて。和紙に英文で印刷された

結婚式の招待状は親が手配し、ベイルートに事前に郵送してくれていた。1967 年戦争直後、緊張した中東パレスチナ情勢のなか、決断には勇気が要ったことだろう。一人娘を戦争の絶えない遠い地に送り出す両親の覚悟も。

結婚式は、京子さんのベイルート到着の翌日、ギリシア正教の教会で行われた。レバノンにはタマリ家の親族が多く、大叔父、大叔母、従兄弟たち、とにかくものすごい数の親戚が集まってきた。そこに、かなわないと思っていたウラディミールの両親の到着！ 1967 年戦争以降の混乱と占領で、一度も連絡がなかった両親が突然目の前に現れたのだった。ウラディミールは驚きと感動のあまり、そして緊張のあまり、しばらく震えが止まらなかったという。イスラエルから特別許可を得て、赤十字の車に乗って 1 週間のみという条件で、実現した両親の参列。パレスチナ人の置かれた状況が激変し、移動の自由は奪われ、心身ともにずたずたにされていたパレスチナ人たちの心に、この結婚は未来の明かりを灯した。戦争と不透明な空気が立ち込めているにもかかわらず、京子をはるばる東京からその中に飛び込んでくれたことに感激した人も多かったに違いない。

結婚前後のウラディミールの仕事はめざましい。1967 年戦争が勃発した 6 月 5 日、ウラディミールはベイルートで UNRWA の視聴覚部門で映画の技術助手として働いており、戦後のヨルダンの状況、とくにヨルダンの砂漠地帯に出現したパレスチナ難民キャンプの何十万人もの避難民の状況を記録することを目的に UNRWA の撮影チームとともに派遣された。だが、当時すでに胎動していた抵抗運動の存在を無視し、ただ貧しく生活物資を必要としている難民を撮るばかりのやり方に、矛盾を覚えた。抗議の意味を込めてきっぱりその仕事を辞めた。その後すぐ、彫刻家で活動家のモナ・サウディからの誘いで、一つのプロジェクトに協力した。バカー難民キャンプの子どもたちに絵を描かせ、イスラエルの爆撃の下でヨルダン川東岸へと逃避したときの経験を子どもたちから聞き取り、コマンドたちをどう思うかなども聞き取り、それを一冊の本にして出版した。その後、親友のハニーと共に再び同じ難民キャンプに向かった。テントの周りはどこも泥土で歩きづらく、凍死する人たちもいたという。ハニーはその取材をまとめ、『戦時下の子どもたちの証言』という本を 1970 年にベイルートで出版している。72 年にはそれを映画として完成させた。ウラディミールが日本に発ってしまってからだ。

1968 年には、パレスチナの主張を世界に発信するために、パレスチナ映画部門の設立を願って詳細な提案をする一方、UNRWA が所蔵していたエルサレムに関連するアーカイブスを利用し、「アルクッズー—アラブ・エルサレム」という 16 分半のドキュメンタリーフィルムを一人独自に編集製作した。英語のナレーションの台本はローズマリー・サーイグ、音楽とピアノ演奏はイブラヒム・スース。エルサレムへの愛と破壊され奪われた悲しみ、喪失、怒りが伝わってくる。だがそれでも絶望しない、という意思表示で終わっているのは、ウラディミールの強い決意でもある。それだけに、1967 年戦争の衝撃の強さとそれがもたらした傷の深さもわかる。1967 年戦争の敗北後に作られたパレスチナ人によるパ

レスチナのドキュメンタリー映画としては最初期の作品だ。この映画が契機となって、PLO のファタハ・グループの中で写真・映画部が設立されることになった。ウラディミールのこの功績は知られていないが、ドキュメンタリー映画「アルクツ」を通して、メッセージのある貴重な映像資料を残したことを記憶しておきたい。

1967 年戦争の次にやってきたのは、70 年 9 月のヨルダンにおけるパレスチナ大弾圧、いわゆるヨルダン内戦または黒い九月と呼ばれる悲劇である。ヨルダンのフセイン国王によって国外退去を宣告され、弾圧を加えられたパレスチナ難民たちは、ヨルダンからレバノンへと移動していった。1967 年戦争直後から移動の波は始まっていたとも聞く。

ベイルートでの穏やかな生活のなかにも緊張の高まりは忍び込んでいた。UNRWA を辞めてまもなく、AUB でウラディミールの絵の個展が開かれた。一方、京子は日本航空のベイルート支社に勤務。1969 年春から研究のために AUB に籍を置いていた山形孝夫（宗教人類学、宮城学院女子大学元学長）は京子とウラディミールと交流があったということを偶然知った。本人に直接聞いたら、ベイルートは日本人に退去勧告が出るほど危険な状況となっていたので、彼も研究を中断し、秋にエジプトに移ったという。その時ウラディミールから子どもの絵を 10 枚ほど渡され、日本に持って行ってほしいと託された。が、エジプトへ行く前にヨルダン経由でエルサレムを訪問しようとして、アレンビー橋の検問で荷物検査を受け、絵を没収されてしまった。憤慨した山形はエルサレムをあきらめ、エジプトに直行することにした。

日本へ避難、そして永住

パレスチナ難民と PLO はヨルダンからレバノンへと再び難民として移動していった。その影響でレバノンでの社会的な緊張はますます高まり、残酷な事件も頻発するようになった。ウラディミールの身近にも危険は迫っていた。京子の親の病気の知らせもあり、二人は日本に避難しようと決心する。1970 年末に来日。憧れの京都暮らしが始まった。京都の文化に心奪われ、慰められもしたが、中東の喧騒と混乱との落差のせいで、逆に不安な日々を過ごしたという。「ベイルートでは大変だったから」と京子に説明をうける。

当初は、一時的な避難だったが、レバノンの情勢が悪化するばかりだったので、半年ごとの滞在ビザの更新が続いた。そしてそのまま日本に住むことになっていった。その後、神奈川県の実山に移り住み、NHK のアラビア語放送の翻訳とアナウンサー、アラビア語教師、英語教師をやりながら、ウラディミールは少しずつ関東の生活に馴染んでいった。タマリ家の人々にとって、アジアの東端から聞こえてくるウラディミールの声をラジオで聴けることは、無事を確認できる以上の喜びだったのではないかと想像できる。

1976 年、最後の故郷訪問

やがて、長女マリムが生まれ、次女モナが生まれた。それぞれ 3 歳、9 ヶ月となった二

人の娘と京子さんを連れて、ほぼ 10 年ぶりに故郷のラマッラー訪問に踏み切った。1976 年冬が近づいた頃のことだった。入国滞在許可をイスラエル大使館から正式な手続きを得ての旅であった。しかし、アレンビー橋の検問で、ウラディミールはイスラエル兵にいきなり拘束され、目隠しをされ手錠をかけられて連行された。父の頭に銃を向け、「もし話しかけたら、撃つぞ」とイスラエル兵は脅した。即座に母は娘たちを抱きしめ、「パパは大丈夫、お昼寝するだけよ。だから話しかけないでね」と言って、やさしく子守唄を歌ってくれたので、安心できた、とマリウムは NHK ワールドのドキュメンタリービデオ（2015 年 9 月放送）の中で語っている。人違いで誤って拘束されたとわかり、ウラディミールは 3 日後には釈放されラマッラーの家族のもとに帰った。

翌日、占領当局の最高幹部将校が謝罪したいと訪問してきた。家族はその軍服を着た「客人」をコーヒーでもてなした。軍服の男たちを怖がることなく話しかける幼子マリウムに面食らったのか、「悪い人間はこういう服を着ていると、娘に言っていないのか？」と将校が冷やかし半分に問いかける。ウラディミールは「ノー。私は憎むということは子どもたちに教えない」ときっぱり。「私は、正しい判断ができるように教えるだけだ」と。「憎しみを教えない、人を憎まない」、これはウラディミールという人間が貫いた生き方なのである。彼からは、一度も人を憎むという言葉聞いたことはないし、人を憎んだことはなかったと京子は証言する。むしろ、平和と愛、赦しを何より大切だと語る人だったとも。

ところで、ウラディミールは人違いで逮捕された、とマリウムが語っているが、彼自身は自伝の中で、違うことを書いている。獄中で、子どもの絵のプロジェクトのこと、その他あれこれと尋問された、と。ウラディミール・タマリは占領当局にマークされていたのだ。ベイルート時代の仕事や友人のことも含めて要注意人物の一人にされていたのだろう。3 ヶ月をラマッラーで過ごして日本に再び戻ったが、それ以降、ウラディミールは終生二度と故郷は訪問しなかった。

このイスラエル占領当局者たちのタマリ家訪問の本当の目的は、謝罪ではなく、ウラディミールを懐柔してイスラエルの協力者になるよう説得することだった。「犬にはならない！」と彼は家人に聞こえるように大声で答えていたそうである。

キリスト者、知識人として異郷にあること

『現代思想 11 月臨時増刊』の板垣雄三氏とのインタビュー（総特集サイド・2003 年 11 月号）で、ウラディミールは自身の経歴を簡単に語っている。その中で特に気になったのは、「1970 年代に出現した過激なグループの行動のあおりを受けて、『パレスチナ』ということばそれ自体が危険なテロリズムを表すものと誤解されるようになり、政治的圧力が加わって日本人にパレスチナ問題の実情を知らせる活動をすすめるのもむずかしくなりました」と語る部分である。

1970 年代の過激なグループの行動というのは、およそ 50 年を経て忘れ去られたかもしれない歴史だが、その後の日本にとってばかりでなく、西側世界にとってまたパレスチナに

とって暗い影として今もなお生き続けている過去である。

世界の衆目を集めた出来事、それはハイジャックや襲撃テロの頻発のことである。当時 10 代の私にとっては忘れられない衝撃であった。ウラディミールとその家族にとってはなおさら重くのしかかった。時には日本社会から距離を置かざるを得ないほどのことであつただろう。

これらの派手なテロ事件とは関係なくとも、パレスチナ問題の核心に気づいてしまった人はそれだけで、それらの過激なグループと同一視され、冷たい視線を浴びるという運命が待っていた。南アのアパルトヘイトに立ち向かう人たちに対する視線をパレスチナには向けてはもらえない。パレスチナ問題においては“共感する”ことにさえ臆病になってしまうのは、この 70 年代の事件がもたらした負の遺産、亡霊である。偏見をつのらせた社会、大半が「バカの壁」になった社会では、何を言っても焼け石に水。パレスチナ人は世界大の監獄におしこまれ、その声は外に届かない。

日本のキリスト者の人々にパレスチナ問題を理解してもらうにも難しい障害がある。聖書には、イスラエルという言葉がひんぱんに出てくるので、古代のイスラエルと 20 世紀半ばに出現したイスラエルとを一緒のものと思い込む人が多い。違うという前提で説教する牧師や神父は多くはない。このことを思い知らされてきたウラディミールの苦悩と孤独は深まるばかりだっただろう。ウラディミールの絵画とデザインで制作された『2017 年カレンダー』があるが、それには日本のキリスト者に理解してもらえるようにとの願いがこもっていた気がする。色調はやわらかく、題材も桜、富士山、カフェの若者たち、チャイコフスキーやドビュッシーなどの音楽を表現した絵、透明なラピスラズリーのコンポジションなど、日本人好みのものが多かった。しかし真のテーマはエルサレム。エルサレムの岩、エルサレムへの思い、天国、祈りなど、静かで深い彼の情熱がこもっている。日本のキリスト者を意識したメッセージだと私は受けとめている。窓を開けてほしいと。そして真実を見てほしいと。

いわゆる第一次インティファダ（1987 年 12 月～93 年）の頃からだと思うが、ウラディミールとは会う機会がぐんと減ってしまった。聞くところでは、特別の友人や家族、親戚を除いて、中東から来日する人たちにはめったに会おうとしなかった。旧友であろうと、映画監督であろうと。私にはそれが不可解な謎であつた。でも、彼の仕事は本質的にひとりでする孤独な作業ばかりなので、人間の群れの中にいる人とは違うのは当然だ（近所の人たちとの普段の付き合いは別の次元のことだったし、自転車には毎日欠かさず乗って楽しんでおられたそうだが）。けれども、京子によると、人に会うことが辛くて避けていた時期はあるし、移動することにも拒否反応を示していたこともあるけれど、一時期に限られていたとのこと。ヨーロッパにもヨルダンにも行ったし、詩人のマフムード・ダルウィーシュとは京都観光に付き合っているし、ハレー彗星を見ようと望遠鏡を抱えて八ヶ岳に車で出かけているし、軽井沢には毎年行っていたそうだ。それにしても、いろいろあつたのだと思う。

「蟻ん子も絶対に踏まない人」と皆に言われたウラディミールである。想像を超える苦し

みや心の傷、悲しみを抱えて生きてきた彼のようなお人好しで繊細で優しすぎる人はおとしめられ、だまされ、傷を深めかねない。そのために内向き傾向が強まるとともに、無限に広がる「美しい宇宙」の理論物理学研究にのめり込んでいったのではないか。彼のホームページではアインシュタインと「論争」している様子が見られる。また、ホーキングスの理論には惹かれていたように思える。マリウムは父とそんな話を夢中でしていたということをどこかに書いていた。

東方正教会のキリスト教徒として生まれ育ったウラディミールも少年時代から信仰が深かったわけではなかった。が、数々の苦難を通して、少年時代の日常の中で見慣れていた礼拝や宗教儀式が次第に意味を持つようになったと本人も自伝の中で書いている。日曜には必ず誰よりも早く教会に出かけ、時には得意の手作りパンをいっぱい抱えて通う、そんなウラディミールの一途さがいとおいしい。その昔、何も知らない私がソルジェニーツィンについて一言二言おしゃべりした時、「神を信じないの？」と残念そうに、そして意外そうに私を見つめていた。忘れられないその言葉。あのとき、彼の神への絶対的な信頼、信仰に迷いがなかったことを知った。

日本のパレスチナ支援運動とともに

私がウラディミールに初めて会ったのは、1982年6月6日に開始されたイスラエルによる大規模なレバノン軍事侵攻、そしてサブラ・シャティーラ難民キャンプの虐殺事件へと続いたあの暑い夏の少し前だった。当時、PLOは外交的に着々と成果を上げていた。アラファト議長が日本政府に正式招待されて来日が実現したのも、その流れの中にあった。その背景には確かにアラブ諸国の石油戦略もあった。超党派の日本パレスチナ議員連盟が発足し、懸命にPLOを日本政府が正式に承認するようにと働きかけていた。日本も独自の外交路線を打ち出し始めるといって、画期的な流れが生まれていた。そのような動きは世界的な規模で進行した。

しかし、その流れを断ち切りたいイスラエルは、アラファト訪日の翌年にレバノン南部とPLO本拠地のあるベイルートへと陸と空からの軍事侵攻に踏み切った。国際的な非難もイスラエル国内からの抗議にも耳を貸さず、破壊と殺戮の限りを尽くした。「中東に平和を求める市民会議」が結成され、日本市民が結集して声を上げたあの夏、たぶん今より市民の意識は高く、連帯の輪は広がっていたと思う。ウラディミールは、そうした市民の抗議運動に励まされ、ポスターを作った。観世音菩薩のような聖母マリアが巨大な手のひらで戦闘機の爆撃弾を防ぎ、戦闘を止めよと諭す絵だ。その後の難民キャンプの虐殺事件に抗議し、「サブラ・シャティーラの犠牲者に寄せて」と題する追悼の絵も描いた。中央の十字架の下にナイフで切り裂かれたザクロの実がごろがっている。直後に開かれた大阪での個展にも出品している。彼はそれをポスターにもした。ポスターではヒロシマ・ナガサキを重ねてノーモア・サブラ・シャティーラの文字がある。

その頃、ウラディミールが日本中の人々の前に登場する機会があった。「ルポルタージュ 日本」という NHK の 30 分の報道番組だ。レバノン侵攻・大虐殺に在日パレスチナ人はどのような思いで見つめ、暮らしているのかを知りたかったディレクターの依頼に彼は快く応じた。かつてドキュメンタリーフィルムに情熱を注いだことのある彼だ。放送は 1982 年 12 月 9 日。「ザクロの実を破壊された故郷（の象徴）と捉え絵筆をとる。故郷を追われ異国に住む在日パレスチナ人の心情を一家の生活と共に描く」と番組紹介される。制作ディレクターは薄井正人（故人）。報告は寺内正義（当時外信部記者）。彼の揺れる心がていねいに描かれていた。このころの NHK のニュースやドキュメンタリー番組にはパレスチナ問題への理解があった。

広河隆一の写真集『ベイルート 1982』の制作のために徹夜で共同作業をしたのもウラディミール。また、学術の世界への協力として、アラビア語を用いたセンスの良い見事なロゴ（「イスラームの都市性」プロジェクト等）を作った。ロゴは、ベイルート時代から制作してきた得意分野だった。

日本の美術家たちとどんな関係を持ったかと問われると、私には JAALA（日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議、代表は故針生一郎）しか名前をあげられない。JAALA は 1977 年に結成された。78 年春にベイルートで「パレスチナのための国際美術展」が開催されることになり、日本からも参加することになったことがきっかけで結成されたとも聞いている。この国際連帯の美術展にウラディミールと初代 PLO 駐日代表の支援は欠かせなかった。そして、そこに出席された作品のうち約 150 点もの作品が JAALA に送られ、7 月に東京都美術館で日本人作家の作品とともに展示されることになった。この記念すべき展覧会は人間と自然の復権をテーマに「第三世界とわれわれ」展と名づけられた。これをきっかけに、その後も隔年で引き続き開催されることとなる。

「パレスチナのための国際美術展」の出品作品が送られてきたから、この上野での展覧会が実現した。2018 年 8 月にも、東京都美術館で第 21 回「JAALA 国際交流展」が開かれる予定で準備が進められているが、ウラディミールの追悼の意思を込めて開かれる。信頼しあっていた針生一郎を通して JAALA の初期を支えたウラディミールのこと、そしてパレスチナを出発点に始まった国際交流美術展としての原点を忘れてほしくない。ついでに付け加えると、不幸なことだが、1978 年の「パレスチナ国際美術展」のために多くの国からベイルートに届けられた作品は、1982 年のイスラエルのレバノン侵攻時に、爆撃で大半が失われたとも聞く。上野での展覧会に展示され、その後ベイルートに送り返された作品も盗難にあったか焼失してしまった可能性が大きいらしい。（同時期にイランで開催されたパレスチナ連帯の国際美術展の作品は幸い生き延びたと聞いている。）

ウラディミールは、海外での展覧会に出品協力してきたが、事故なのか間違いなのか、はたまた故意なのか怠慢なのか、出品した作品が返却されなかった経験が何度もある。紛失したり、運搬中に盗難にあったり……。失望と悔しい思いからくる恨みは長く続くものであり、

消え去らない感情だと思うが、驚くことにウラディミールは決して恨まない。忘れられなくても、怒らないし赦していく。誰かがその絵を見ている、発見している、驚いているかもしれないし、気に入っているかもしれない。嬉しい気持ちになっているかもしれない。「役に立っていたらそれでいい」と気持ちを定めてしまう。

ここ 10 年以上、ウラディミールの個展が途絶えていたので、そろそろ個展を開いてみてはどうかと私が打診すると、そのつもりなのだけれど、という返事はくる。だが、それ以外のことに忙しくて乗り気になれなかったのだろう。15 年くらい前に開かれた彼の個展会場で、ギャラリーを自分で持とうと考えている、などと私は真顔で打ち明けたことがある。彼は「僕の個展で始めてみない？」と励ましてくれたが、見通しは全く立たなかった。もしかして、そのギャラリーの誕生を待っていてくれたからだろうか。

彼の個展で強く記憶に残るのは、上野の「スペース・ニキ」という広いギャラリーでのもの。1982 年夏のレバノン侵攻の嵐が過ぎたその年の 11 月から 12 月にかけて開かれた。ニキ・ド・サンファルの美術に魅せられて収集家となった故ヨーコ増田静江がギャラリーのオーナー。彼女とは温かな親交があったそうである。ふと、ニキとウラディミールの作品にはどこか共通点がある気がした。鮮やかな色彩のせいかもしれない。なにか作品の内側から発せられる声に共通するものがあるのかもしれない。亡くなる 2 ヶ月前、ヨーコの子息からウラディミールの作品を所蔵の美術品の中に偶然見つけたという知らせがあった。病床にあったウラディミールにメールで伝えると、うれしそうな返信メールが届いた。

ギャラリーを作れなかった私の償いという思いで、そして個展を開かないウラディミールのために、私は思い切った提案をした。2017 年のカレンダーを作ろうと。私にかかる負担を心配して当初は慎重だったが、パレスチナ子どものキャンペーンが関わってくれる約束をしてくれたので、カレンダープロジェクトは動き出した。すでに 9 月の半ばに差しかかり、カレンダーを制作するには遅すぎる時期になってしまった。しかしウラディミールは一心不乱に制作に打ち込んだ。絵画 13 作品で構成される「2017 年パレスチナカレンダー〜エルサレムへの想い〜」には、数字も英語も日本語もアラビア語も彼の考案した書体アルクツズ体が用いられた。彼の壮絶な集中作業の結果、9 月末までにほぼ原案は完成した。そこで思わぬ事態が発生した。ウラディミールの緊急入院である。10 月からは入院、手術、安静、退院を繰り返す彼に、細かい手直し、色校、加筆などをしてもらう。印刷そして製本、完成したのは 10 月末だった。彼とプロジェクトの「戦友」として過ごした 2 ヶ月間は私にとって幸せな日々であった。しかし、私たちは一度も会わないまま、別々に離れたところで、それをやりこなした。京子と緊密に連絡もした。郵便とメールを駆使した。原案がよく出来ていたこと、病院からの彼の的確な指示があったこと、そして印刷所の技術力が彼の要求に答えてくれたことで完成した。

しかし、この後私は衝撃的な事実を知った。彼の病気が末期がんだったのである。だが刷り上がったカレンダーを手にした 11 月はじめ、彼は心から喜んでくれた。カレンダーを手にとってベッド横に立つウラディミールの写真が送られてきた。こういう心配りをしてく

れる人なのだ。その後カレンダーは順調に売れていった。ラマッラーでもたくさん配られた。彼の絵が身近になった人は多い。ウラディミールは、病院で世話になった医師や看護師、あらゆる人に感謝の印としてカレンダーを配った。

12月1日、17時間に及ぶ大手術が行われる。大手術を終えたウラディミールが早速やったことで興味深いことがある。術後、目覚めたばかりの自分の意識の朦朧状態、幻想を絵と文で記録しているのである。それを彼はホームページに掲載している。「完全麻酔から覚めたときの視覚幻想についての主観的な図解報告」と題された短い論文。主観的と書いているが、恐ろしいほどの客観的、冷静な観察である。徹底的な科学者、好奇心の権化である。

3ヵ月の入院が予想されたが、3週間で退院し、キリストの生誕日を米国とフランスから帰国した二人の娘と孫たちと一緒に祝うことができた。それから静かにゆっくり過ごしていたと思う。2月だったと思うが、私宛に小包が彼から届いた。開けてみると、なんと一枚の色あざやかな油絵が出てきた。私の名前がアラビア語のカリグラフィー作品になっている！ ありがとう、ウラディミールさん！

それから2ヶ月後、4月GWに入る直前、10余年ぶりに私は彼に再会した。前年12月の大手術後初めての入院生活で1ヵ月が経とうとしていた時だった。若いドキュメンタリー映画監督モハナド・ヤクビーと美術の女性学芸員二人がそれぞれラマッラーとベイルートから来日しており、ウラディミールに会うことを楽しみにしていたので、私は案内人として一緒に病院を訪問した。ベイルートから来日した学芸員は、例の1978年のベイルートで開かれた「パレスチナのための国際美術展」とJAALAとの関係のリサーチをしていた。ウラディミールから直接に当時のことを聞きたいとも願っていた。

インタビューで彼はモハナドの向けるカメラに向かって、アラビア語、時には英語で真剣に話している。その様子は、まるで遺言を遺していくようであった。彼は自分の命が長くないことを知っていたのだ。少年時代から日本の美術に関心があり、浮世絵、特に北斎を愛していたと話している。しかし最も力を入れて話していたのは、彼の発明である3DDについてであった。

ドバイ発のネット雑誌『ブラウンブック』がインタビュー取材をした記事が2016年11月に掲載された。インタビューの中で、日本に住んでいて、これがなくて寂しいと感じるのは何かと訊かれて、「中東では話しかければ人は相手の目を見て話すという習慣がある。それがないのが寂しいね。それからハグし合ったり、握手したりもここでは普通にはないし」と答えている。そうだったのか。私も遠慮しすぎていたのかなあ、と後悔である。

モハナドたちと一緒に会った病院で、カレンダーをまた作る気はあるか念のため聞いてみた。返ってきた言葉は、「それより今度は作品集を作りたい。」それはやり残した最後の仕事だったのだろうか。その仕事を私に託したのだろうか。いえ、その願いを誰かに伝えることを私に託したのだ、と思う。

「われらの国籍は天にあり」

ここで、日本の二つの雑誌に掲載されたウラディミール自身の言葉を引用して、私流の追悼文及び紹介文をそろそろ終わりにしたい。

私共の日常生活はともすると終わりのない無益な競争の中で表面的な目的のために走りやすいのではないかと思う。しかしキリストは私達が「彼」に従うとき、真の生命があると教えています。親として娘たちに自分たちの生き方を通してキリストへの道を教えなければならないと思っている。彼女たちがキリストの愛を心に覚えて成長したなら、この困難な世の中で将来どのような道を進むとも、親は心配せずにすむと思う。

(『婦人之友』1977年5月号)

日本では、愛する妻＝京子の支えがあって、私もこの文化交流・協力の活動にいささか尽くすことができましたが、その後はだんだん、絵を描くことと三次元製図器の発明とに遥かに力を注ぐようになり、さらに最近は物理学の研究に熱を入れています。日本に来てから、二人の娘、マリウムとモナが生まれましたが、今では、日本とパレスチナ、そしてパレスチナの向こう側にあるより大きな世界とのあいだの相互理解、平和、友好のための「橋」づくりに貢献する娘たちの時代がすでに始まったようです。

(『現代思想』11月臨時増刊)(総特集サイド・2003年11月号、第31巻第14号)

ウラディミールと京子の願いを、二人の娘たちは立派にかなえている。マリウムは、米国のプリンマー大学で哲学と音楽を学び、現在パリを拠点にソプラノ歌手として、アジア、欧州、北米、南米、中東などで活躍中。月刊誌『すばる』でコラム「パレスチナの朝」の連載も133回(2018年5月当時)を数えているほど人気があり、名エッセイストとしての才能も発揮している。妹モナは、英国のブリストル大学で英文学を学んだ後、米国のMITで建築学を学び、現在サンフランシスコで、建築家として活躍しており、同市の地下鉄の新3駅の設計を任せられ、注目を浴びている。二児の母としても奮闘中。パレスチナの未来のためにも二人の娘は、両親の願いを心に刻んで毎日を懸命に誠実に生きている。

2017年8月3日、「返事はお書きになれないと思うけれど、よくお休みになってください」と病床にあるウラディミールさんにメールした私に「ありがとう！」と返信をくださった。その3日後に亡くなるなんて思いもしなかった。彼は親しくした人たち全員に「ありがとう！」のメールを送っていたと京子さんから聞いた。そして、毎日几帳面に付けていた日記もその日で途絶えた。

いまウラディミールさんは東京の多摩墓地に眠っている。義父母が眠る墓で共に。京子さんの母である星子さんが自ら書いた墓碑の言葉は「われらの国籍は天にあり」。

(了)

【追記】

以上は2018年5月号の『現代思想』（特集パレスチナ—イスラエル問題—暴力と分断に70年）に掲載されたエッセイ「故郷喪失の半世紀と日本 ウラディミール・タマリ氏へのオマージュ」です。ほぼそのままの転載ですが、原文に僅かな手を加えました。

刊行後3年が経ちましたので、以下、少し書き加えることをお許し願います。

アルジェリアの小説家ヤスミナ・ハドラが「死者にとって最高の墓は、生きている人間の心だ」というようなことを書いているそうです。天に居られながら、生きている私たち一人ひとりの心に居られる、と思うと慰めのうれしい言葉です。

ウラディミールさんの死亡記事は、共同通信配信での日本の新聞に掲載されたことを、ここでお伝えします。

■本文の後半の章「日本のパレスチナの支援運動とともに」に、日本の美術家との関わりを書きましたが、2018年8月に東京都美術館で開かれたJAALAの国際交流展ではJAALAにゆかりのあるウラディミールさんの追悼コーナーを設置してもらい、約10点の大小の作品を展示することができました。作品を所蔵している日本人の5人の方々からお借りできた8点とポスター作品に加え、妹のヴェラ・タマリさん（パレスチナのビルゼイト大学の美術科教授）からパレスチナ西岸の印象的な風景画2点が親切な旅行者によって運ばれてきました。また、幼少期からの親友であったカマル・ボラータさん（当時ベルリン在住、パレスチナの代表的アーティストの一人で、パレスチナの美術史の著作もある）からも抽象画3点が届けられました。これらの絵画はすべて、展覧会後に出版されたJAALAの刊行冊子の中に掲載されています。カマル・ボラータさんは、ウラディミールさんの逝去の2年後、奇しくも同じ8月6日に亡くなりました。ともに1942年にエルサレムで生を受けたパレスチナ人。一人は75歳で東京の地で、またもう一人は77歳でベルリンにて人生の幕を閉じたわけです。

<https://www.theartnewspaper.com/news/kamal-boullata-dies>

ボラータさんの多数の著書・編著の中には次のようなものがあります。*Palestinian Art: from 1850 to the Present*, 2009; *There Where You Are Not: Writings of Kamal Boullata*, 2020; *Women of the Fertile Crescent: An Anthology of Arab Women's Poems*, 1981; *Faithful Witnesses: Palestinian Children Recreate Their World*, 1990.

ここで、この夏ウラディミールさんの作品がご覧になれる展覧会のお知らせをアナウンスいたします。2021年8月11～16日には第22回JAALA国際交流展2021が横浜市民ギャラリーあざみ野で大規模に開催されます。レバノン、シリア、パレスチナ、西サハラ、クルド、台湾、コロンビア、エルサルバドル、チリのアーティストたちの作品が多数集結します。

ご案内はこちらを御覧ください。 <https://artnavi.yokohama/event/9786/>

現在、妹のヴェラ・タマリさんは、娘のマリアムさんとともに、ウラディミールさんの作品集を出版するための作業を共同で進めておられます。

■マリアムさんは、衰えていく父のためにもと東京でソロコンサートを開催することを熱望しておられましたが、かないませんでした。1年後の2018年9月末に豊島区にある自由学園明日館講堂で『水彩のメロディー』というテーマで200人余の聴衆を集めて、ウラディミールさんを追悼するコンサートを実現されました。会場奥のギャラリーでは大小十数点の水彩画が飾られ、来場者に鑑賞いただきました。このコンサートの準備と運営に京子さんとその二人の娘、そして京子さんの親友とともに私も力を合わせました。

マリアムさんの活躍はその後めざましく、最も影響力のあるアラブ女性100人の一人にアラブの雑誌に選ばれるほど、注目を集めています。新型コロナウイルスが蔓延する直前、2020年1月から3月にかけて、オペラ「蝶々夫人」の主演に抜擢され、英国の国内巡回公演を無事に成し遂げました。その後はコロナ禍のなかで、音楽活動が難しくなりましたが、息苦しい日々のなかでも、リモートでつなぐ音楽活動を仲間たち行い、ネット配信をするなど、新たな活路を開いています。

4月からエルサレム近郊のシェイフ・ジャラー住民の抵抗から始まったパレスチナ人の抵抗運動とそれへのイスラエルによる弾圧、ガザへの大規模爆撃で明らかになった「アパルトヘイト体制」に対するパレスチナ人の抵抗はこれまでになく絆を強め、一つの大きな粘り強いレジスタンスとなっています。そしてまた、世界の市民による共感と連帯の表明へと広がり、ガザをめぐる停戦で終わらせられるものではないと、抗議運動は息長く続こうとしています。

数百人ものパレスチナ人アーティストと知識人の立場からも『アパルトヘイトに反対する書状』の署名運動もその一つ。その運動の目ざすところは、世界の人々にパレスチナ人が抵抗する理由と意味を伝え、理解と共感、そして支持を得ることです。その一人として当然マリアムさんもいます。

最後に、ウラディミールという名前の表記は間違っているのではないか、ウラディミールではないかという疑問の声があったので、一言。アラビア語の場合、終わりの音節を伸ばすという特徴があるので、アラビア語風になっているのは自然であると。

【参考ウェブサイトと参考資料】

<http://vladimirtamari.com>

(ウラディミール・タマリのホームページ)

<https://www.youtube.com/channel/UC7NoD82Bzhyif4isL4GpRPw/featured>

Vladimir Tamari のYouTube ショート4点、アップロード動画が8点、観覧できる。

<https://youtu.be/qn-nTCLTdCI>

(Al-Quds: Arab Jerusalem, 1968年製作ドキュメンタリー、ウラディミール・タマリ編集、英語、16分36秒。67年戦争の直前と直後のエルサレムが撮影された歴史的に貴重な証言。)

(NHK worldのAsian Dreamersシリーズ “My Song My Palestine Mariam Tamari” マリアム・タマリのドキュメンタリー、英語、15分。再生回数が1万回を超えている。)

<http://mariamtamari.com>

(マリアム・タマリのホームページ)

<https://www.youtube.com/channel/UCr-t...>

(マリアム・タマリのYouTubeチャンネル)

Tania Tamari Nasir, “My Jerusalem: Vladimir Tamari”, *This Week in Palestine*, Oct. 2011, Issue 234, pp.22-23

砥川春樹「日本人とパレスチナ人のはざまに生きるー在日パレスチナ人画家 ウラディミール・タマーリ氏」『フィラスティン・びらーディ』1982年12月号、pp.32-36

ウラディミール・タマーリ「モナに愛と敬意をこめて」アンマンからの「手紙」モナ・サウディ「廃墟のベイルートを去って」『フィラスティン・びらーディ』1982年12月号、pp.37-41

V.タマーリ、広河隆一、板垣雄三、小西昭之、小林弘一、牟田口義郎「エルサレム問題を語る（座談会）」『フィラスティン・びらーでい』1982年6月号、pp.12-19

「犠牲者は暗黒の中の炎ー在日パレスチナ人画家の新作」『フィラスティン・びらーでい』1982年11月号、p.50

鷺見哲彦「戦うパレスチナの美術家」『フィラスティン・びらーでい』1980年11月号、pp.64-67

V.タマリ（聞き手板垣雄三・訳）「シャドウライン越し透視画法ーサイドについて語る／断章」『現代思想 11月臨時増刊』（総特集サイド・2003年11月号、第31巻第14号,pp.37-43

「子どもの未来にーヴラディミル・タマリ〈グラビア〉『婦人之友』1977年5月号、第71巻
第5号、pp.20-21

JAALA「第三世界とわれわれ」展実行委員会『1978人間と自然の復権ー特陳「パレスチナ
のための国際美術展」〈カタログ〉』1978年7月

マリアム・タマリ「パレスチナの朝122 地球国籍パスポート」『すばる』2017年6月号、
p.249